

演題番号：

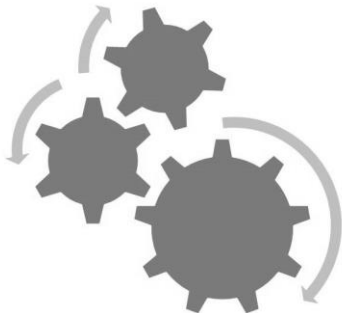
Low-grade Lymphoma と診断したイヌの 1 例

○明石 太郎¹、上ノ丸 花子¹、和坂 由香里¹、硯 綾乃¹、田町 元¹²、林崎 一雄²

¹□□動物病院・[○]○支部、²△△大・内科

はじめに：イヌのリンパ腫は、米国国立癌研究所の作業委員会（NCI-WF）により、細胞のタイプと悪性度に基づいて 3 グループ（Low,Intermediate,High）に分類されている。今回、我々はその中でも発生がまれ（5.3%）な Low-grade Lymphoma（LgL）と診断した症例を経験し、その治療方針ならびに予後について検討した。**材料および方法：**症例は、12 歳齢、雄のゴールデンレトリバーで 10 歳齢時に体表リンパ節の腫大を主訴に来院し、リンパ節の切除生検によりリンパ腫と診断されたが、オーナーの希望により治療は行っていなかった。14 ヶ月後、食欲廃絶、左後肢の跛行を主訴に来院、体表リンパ節はさらに腫大し陰嚢浮腫が認められた。肝腫、脾腫があり、また血液検査では著しいリンパ球増多（55,230/ μ l）を伴う総白血球数の増加が観察された。血液塗抹では、クロマチン凝集が認められる比較的小型の核と淡明でやや広い細胞質を有する成熟リンパ球様細胞が増加していた。以上から慢性リンパ球性白血病（CLL）または LgL を疑い、リンパ節生検標本の再評価を行い、その後の臨床経過と併せて、LgL と診断した。末血中腫瘍細胞の表面マーカー解析により B 細胞由来であった。**成績：**LgL は病期の進行がきわめて緩徐であり、臨床徴候がなければ CLL と同様、無治療で経過観察するのが推奨されている。本症例ではリンパ節腫大により浮腫ならびに跛行という症状を伴っていたため、メルファラン（1.5mg/m²）とプレドニゾロン（20mg/m²）による治療を開始した。跛行は改善し、体表リンパ節も縮小傾向を示し、治療開始後 110 日には血中リンパ球数が減少（22,348/ μ l）した。第 646 病日現在、リンパ節の腫大を除き臨床症状を認めないため投薬を休止している。**結論：**本症は High-grade Lymphoma（HgL）に比べ、予後が良いことが知られており、また治療法においても HgL で行われている一般的な化学療法には反応が乏しいことが明らかにされている。したがって病型および組織学的に LgL と診断することは予後の予測や治療法の選択を行う上で重要であると考えられた。また、一旦リンパ腫と診断した症例でも、その後の臨床経過や HgL に対する化学療法に反応が乏しい場合には本症を疑い、再評価するべきであると思われた。

図表1



図表2

